

氏 名	南 美 慧 (ナム ミヘ)
学 位 の 種 類	博士 (造形)
学 位 記 番 号	博第 14 号
学 位 授 与 日	平成 25 年 3 月 19 日
学位授与の要件	学位規則第 3 条第 1 項第 3 号該当
論 文 題 目	<b>軽井沢彫家具の研究とデザイン</b> <b>彫りと装飾をめぐって</b>
審 査 委 員	主査 武蔵野美術大学 教授 寺原 芳彦 副査 武蔵野美術大学 教授 小林 昭世 副査 武蔵野美術大学 教授 朴 亨國 副査 川上デザインルーム代表、多摩美術大学客員教授 川上 元美

## 内 容 の 要 旨

### 本研究の目的と背景

本論文は、今日のインテリアおよび家具デザインにおいて、伝統工芸や職人による手仕事の重要性を確かめ、新たな切り口によるデザインの提案を目的に、軽井沢彫家具という木彫洋家具を中心に、その成立の歴史および変遷の流れに対する調査分析から造形的特徴を明確にした上、今日的意味を確かめるものである。

軽井沢彫家具とは、明治 19 年 (1886) 2 人の西洋人が訪れて以来、外国人避暑地として開発されてきた長野県の軽井沢町で生まれた木彫洋家具および調度品のことをいい、百年余の歴史を有する。軽井沢彫家具の製作が始まったとみられる明治中期の日本は、幕末の開港からなる西洋文化・文明の導入によってさまざまな分野で近代化が始まっていた。それは、住文化においても建築はもちろん、家具や室内装飾についても、政府が率先してお雇い外国人の指導のもと、近代化を推進していき、これを機に、東京を始め、横浜や神戸などの港町を中心に洋家具産業が本格的に始まっていた。東京の芝家具、横浜の元町家具などが代表的で、少し時間差はあるものの、明治中期頃にはその地の産業としての位置を確立させていた。これらの洋家具の製作は、明治政府が行っていた洋風化政策とともに、外国人居留地における実用的需要から始まった場合が多い。軽井沢彫家具の製作も同じく、避暑に軽井沢を訪れる外国人 (主に欧米人) の数が増えるにつれ、別荘の建築が盛んになり、椅子式生活を営む彼らの生活に欠かせない椅子やテーブルなどの家具類の需要が高まってきたことから始まったものとみられる。しかし、高まる需要に応えるため、宮大工や船大工が転業し、外国人が持ち込んでいた家具や絵などを教科書に、そのまま真似していた他洋家具産業とは違って、軽井沢彫家具は日光彫という日光東照宮の再建からなる伝統の木彫工芸を前身にしており、西洋からの家具の形に、日光彫に由来する東洋的モチーフの彫

刻が合わさった、他にない独特なスタイルの家具として完成されたことであり、本研究における動機がここにある。

## 目次概要

### 序章

#### 第1部 軽井沢彫家具の成立

##### 第1章 国際避暑地軽井沢の誕生

###### 第1節 軽井沢を訪れた二人の西洋人

###### 第2節 軽井沢を選んだ理由

###### 第3節 別荘数の増加と街の産業

##### 第2章 軽井沢彫家具の始まり

###### 第1節 開港による日本洋家具産業

###### 第2節 軽井沢彫家具の始まり

##### まとめ

#### 第2部 軽井沢彫家具の造形的特徴とその変遷

##### 第1章 現地調査による関連資料・史料の収集

###### 第1節 作品資料の概要

###### 第2節 彫刻表現とモチーフ

###### 第3節 木材と制作過程

##### まとめ

##### 第2章 意匠の変遷：「日光彫」から「軽井沢彫家具」へ

###### 第1節 時代別代表的資料(分類基準)の設定

###### 第2節 「日光彫」から「軽井沢彫家具」へ

###### 第3節 桜文様

##### まとめ

#### 第3部 今後の軽井沢彫家具におけるデザイン提案

##### 第1章 軽井沢彫家具の可能性

###### 第1節 伝統工芸品としての軽井沢彫家具

###### 第2節 現代のデザイン文脈からみる軽井沢彫家具の位置と可能性

##### 第2章 新しいデザインの提案

###### 第1節 第1回軽井沢彫家具デザインワークショップ

###### 第2節 最終デザインの提案

## 結論と展望

## 本論文の概要

第1部「軽井沢彫家具の成立」においては、不明な点の多い軽井沢彫家具の成立の歴史および各工房の流れを確かめた。第1章では、文献および当時の新聞記事を中心に、軽井沢彫家具発祥の歴史的背景として避暑地軽井沢の成立および発展過程における要因について考察し、当時軽井沢に訪れていた外国人たちが新しい避暑地軽井沢に対して求めていたものについて考えた。第2章では、開港によってさまざまな分野で近代化が進んでいた明治期の日本における洋家具産業の歴史を確かめた上、そこからみえてきた幕末から明治末期までの洋家具、室内装飾における意匠の変遷の流れの中から、軽井沢彫家具の位置づけを試みた。なお、軽井沢彫家具の全身とされる日光彫および日光という地について考察し、軽井沢彫家具との関連性を再確認した。

第2部「軽井沢彫家具の造形的特徴とその変遷」では、現地調査から収集できた作品および関連資・史料の分析から、軽井沢彫家具の造形的特徴を確かめた上、明治中期から大正、昭和にわたる意匠の変遷過程を明らかにした。第1章では、第1部の歴史的考察に基づき、現地調査を行い、写真撮影、測量による1次資料を収集し、軽井沢彫家具関連資料リストを作成した。なお、集められた作品資料を種類別、洋式別に分類し、軽井沢彫家具の概要としてまとめた。第2章では、現地調査での関係者のインタビュー内容および集められた当時の写真や報道資料から得られる2次資料から、時代別基準となる資料を定め、明治中期から昭和にわたる軽井沢彫家具の意匠的変遷過程を明らかにし、軽井沢彫家具の造形的特徴としてまとめた。

第3部「軽井沢彫家具の今日的意味」の第1章では、大正から昭和をへて、現在までの産業としての流れを考察し、洋家具業として、また伝統工芸としての軽井沢彫家具の現状を確認し、今後のために必要なことについて考えた。なお、現代のデザイン文脈から軽井沢彫家具がもっている意味について考え、今後のデザイン提案に向けてのキーワードを定めた。第2章では、平成22年、デザイナー側と職人側がチームを組み、新しいデザインの提案を試みた第1回軽井沢彫家具デザインワークショップについて説明する。なお、試作を行い、その評価から今後の最終デザイン提案に向けて、守るべきこと、そして変化すべきことについて考えた。

第3部第2章第2節「最終デザインの提案」では、今までの研究から得られた軽井沢彫家具のアイデンティティーを生かすデザインポイントを踏まえ、新しい切り口による家具のデザインを提案することを試みた。

## 審査結果の要旨

本研究は、本学博士課程「環境形成領域」の研究として、研究論文および制作からなるものであり、「軽井沢彫家具」に焦点をあて、歴史、変遷および造形的特徴、さらには今日的意味の考察と実践に取り組んだ的確且つ模範的研究といえる。

伝統に根ざした家具の発祥のきっかけはさまざまであるが、軽井沢彫家具は西洋人宣教師の来訪によるという極めて特異な存在で、その成立と変遷を解明することは家具および工芸の領域において大変意義深い。

その視点から論者は軽井沢の歴史的展開と考察を踏まえて、彫りと装飾の歴史も辿り、紐解き、歴史的つながりを明らかにした。軽井沢彫家具については資料文献が少なく、現地での聞き取り、撮影、測量等を多く行ない、それらを確たる独自の視点により分類、分析、解析したことは研究の本道を歩んだといえてよい。

軽井沢彫家具が、発祥のきっかけから時代と共に日本で最も文化度の高い避暑地に根ざし、溶け込んだ要因は自然植物である竹、牡丹、菊、桜に代表される伝統的模様と彫りが華美というより素朴として表現されていたことにあり、その知見を意匠・デザインに繋げたことも評価できる。又、彫刻の具体的な特徴において、「地消し」に施された「星打ち」についても日光彫りから受け継いだ技法であること、さらには金工などに取り入れられた魚々子打ちに由来することなど意匠上極めて重要な部分を探求している。その彫りの効果を引き出し、制作上の要素としている点は感性の鋭敏さを思わせる。主な模様となる桜についても起源および由来を論旨の一つとして魅力の解を求め、とくに五弁の桜を正面向きに開いた姿と枝の關係に着目し、視覚的印象を歴史的考察と独自の観察眼をもって引き寄せている。

まとめとして、軽井沢彫家具の位置付けを俯瞰し、他の西洋家具発祥である港町中心の横浜、神戸、函館などの家具との様式を比較していることも軽井沢彫家具の特徴を明らかにしている。それは他に全く類を見ない彫りと装飾を伴った家具であることを証明している。微細視としても様式家具と異にする部分に深く関心を抱き、探求し究明している姿勢は高いレベルといえる。それら研究の成果一つ一つを数多く集積して独自の意匠・デザインおよび制作に結びつけており、伝統を残しつつ洗練されたものに仕上げている。それは日本の情緒性を他領域文化からも学び、又最大の特徴である彫りの存在感について再認識と再発見し、意匠・デザイン上押さえ気味の彫りの中にも微妙な深淺を巧みに表現したのはみごとである。

### 審査経過と結論

予備審査を平成24年7月11日に実施した。その概要は以下の通りである。

伝統工芸家具は、その発祥の「きっかけ」の探求と把握が肝要であり、それを踏まえ、軽井沢に居留した西洋人の生活と共に歩んだという他にない家具であることの確証を現地

での聞き取り調査をもって資料収集し、「軽井沢彫家具の成立」を解明したことは大いに評価できる。しかしながら、彫りと装飾における具体的検証に一層の検討を要し、又日光彫りからの移行についても明快さを望むところであると指摘した。制作面については、ワークショップ実施時に新規性のある彫りと家具の融合を表現し、高い評価を得た。

その結果として、再検討すべき部分を加え、再整理し、意匠・デザインへ繋がる要素を抽出して伝統を踏まれた上で、今日的意味のある軽井沢彫家具についてさらに深い考察を伴う論文と制作に期待し、審査員総意の上で「合格」とした。

平成25年2月23日に、公聴会ならびに最終審査が行なわれた。

本審査概要は以下の通りである。

1. 不明な点が多かった一次資料（現地撮影、測量等）と二次資料（現地ヒアリング、写真、報道写真等）を調べ、データベースとして研究・デザインの立場から共通に利用できる多くの要素を整備したことは評価できる。
2. 軽井沢彫家具の成立と変遷について、先行する日光彫りとの関連性および国際的避暑地である軽井沢の発祥・発展との関連性において意匠・制作を論じている点も独自性があり、大いに評価できる。
3. 現代のデザインにおいては、あまり取り沙汰されることのない「装飾」を論点の一つにしたことは独自性があり、新しいデザイン視座の可能性に示唆を与える。
4. 多様化している現代のデザインにおいて、彫りを伴う装飾を深く探求し、彫りを生かした心地よい又洗練されたデザインにしたことは評価できる。
5. いま伝統と現代デザイン、文化とデザインという問われる課題に対し、一つの解釈を提示するものであり、軽井沢彫家具の可能性を導いた。  
又今後のデザイン視界・展望が開けるきっかけになる内容であると確信できる。

以上、さらなる発展と期待をもって、審査員一同は、本研究がこの領域の制作と研究を切り開き、この課題に対する研究に寄与するものであると認め、武蔵野美術大学の博士（造形）の学位を授与するに相応しいと判断した。





1・2 table A (left)  
W540×H450  
Table B (right)  
W450×H350  
3 table B (detail)  
4 console  
W800×D300×H800

5・6 console (detail)  
7 stool  
W400×D320×H400  
8 stool (detail)  
9 平成 24 年度博士後期課程研究発表展